

ふと、身体感覚に異常を検知し、意識が浮上する。
大きな異常ではない。が、放置しておくとな重大なエラーにつながる可能性がゼロではないため、確認しようと瞼を開いた。

「……ん」

まだ薄暗い視界のなか目に入ったのは、私の胸元にすり寄るようなかたちで眠っているヴァンだった。四肢を投げ出し、気持ちよさそうに眠るその姿は、あまりに無防備でなんだか落ち着かない。

(どうしてヴァンがここに……？)

アイドリング状態だったメモリが動き出し、昨日の出来事がよみがえってくる。
そうだ。昨日遭難し、ふたりしてバッテリー切れを起こしかけていたのだったか。そうして起動したイザナミ式システムによって難を逃れ、無事救助され――

『……やだ、もっとワルターと一緒にいたい。今夜だけでもいいから……だめ？』

(おそらく、遭難による極限状態により危機感知デバイスが一時的に誤作動を起こし……不安を感じているのだろう)

この程度なら自己修復プログラムでじきに直るだろうが、もともと彼の監視は自分の任務のひとつでもある。そういうことならばと了承し、部屋に連れ帰ったのだ。

時刻を確認すると、予想していた通りいつも活動を開始する時間よりまだ早い。しかし、私のエネルギーは満タンだ。これ以上ベッドにいる理由もない。早くに起きて今日の任務の準備をしておくというのもいいだろう。

そう考えながら、なんとなく目の前で眠るヴァンの髪へと手が伸びる。猫のような細くつややかな髪を、指でやさしく梳く。そうしているうち、ふとあることに気が付いた。

(ヴァンのエネルギーが、充電されていない……？)

このベッドは、上に寝転ぶだけでヒューマノイドを充電してくれる装置でもある。これまで何度も使用してきたのに加え、今日も問題なく私は充電できている。

ならばどうして、ヴァンだけが。

慌ててベッドから抜け出すと、不具合がないかを探る。しかし、ベッドのどこにも異常は見られず、原因はわからない。

一度蒲葡さんに見てもらう必要があるかもしれない。この部屋でヒューマノイドを充電できるのはベッドのみだ。至急蒲葡さんに連絡をとろうとするも、当然ながら寝ているようで応答はない。仕方なくテキストメッセージを残し、他の方法を考える。

早く充電する術を見つけなければ、今日の任務に支障が出てしまう。それ以上に、エネルギーが足りていないヴァンの隣で私だけ充電していたなど、あまりに可哀想だ。

気持ちよく寝ているところを起こしてしまうことにはなるが、ヴァンをほかの充電装置がある場所へ連れて行ったほうが早そうだ。

そう思い振り返ると、先ほどまでそこで眠っていたはずのヴァンの姿がなくなっていた。

「……ヴァン？」

「……………」

代わりにあるのは、こんもりと山のようにふくらんだ布団だ。そこにいるはずと声をかけると、少ししてひょっこりと亀のようにヴァンが顔を出した。

その表情はなにかもの言いたげに歪んでおり、私をまっすぐに見つめている。

「もしかして、起こしてしまいましたか。」

あまり音を出したつもりはなかったものの、眠りを妨げてしまったのならば申し訳ない。そう思いながら聞かすが、返事はない。どうやら素直に教えてはくれないようだ。仕方なく思考を巡らせ、原因を探る。

私がベッドから離れる前は、確かに眠っていた。

つまり、私が離れた短い間に何かが起こったのだろう。

「どこか不具合でも起きましたか？ その布団……まさか温度調整デバイスに何か異常が？」

「……………」

「聴覚システムに異常はありますか？ それとも、言語プログラムでしょうか。」

「……っ」

ふるふる、と首を横に振られる。どれも違うらしい。そうなるとやはり、あのことだろうか。確かに、そうだとしたらこの部屋へ招いてしまった私の責任だ。

「気づくのが遅れてしまいすみません。正常にあなたの充電が行われていないことについては把握しています。確認したのですが不具合の原因がわからず……蒲葡さんにテキストメッセージは送ったので、すぐに原因を……」

「……ほかの人の名前、やだ。聞きたくない」

蒲葡さんの名前を出した途端にキッとにらみつけられる。そしてこちらが口をはさむ隙もなく、再び布団の巣穴へと引っ込んでしまった。

何度か声をかけるも、応答はない。いったいどうすれば出てきてくれるだろうか……と途方に暮れながらベッドに腰掛けると、ひゅっと空を切る音が聞こえた。

「——っ！？」

ぎゅう、と何かが腰に強く巻きつく。それがヴァンの腰のあたりから生えたコネクタであることに気が付いた。意志を持ったように器用な動きを見せるそれは、まるで動物のしっぽのようだと考えている隙に、ベッドへ引き倒されていた。

「うっ！ヴァン？」

「.....くな」

私の上に馬乗りになったヴァンが何かをつぶやく。その体は熱暴走しているかのようにあつかった。状況を探ろうとCPUを回転させるが、うつむいているため髪に隠れ表情は見えず、聴覚システムでもうまく聞き取れない。

困惑しながら何も言えずにいと、ヴァンのコネクタは、さらに腰に強く巻きついて力を増した。

「僕を置いていくなっ！」

悲痛な叫び声とともにヴァンの排熱用液が涙のようにあふれだす。それが頬を伝ってぱたぱたと、と雨粒のように肌に落ちるのを感じながら、ヴァンの放ったセリフを反芻していた。

置いていくな、とは。いったい何の話をしているのか。

意味が分からずフリーズしている間も、上から「ひとりにしないで」「いかないで」と、か細い声が降ってくる。明らかに正常ではない。どうにかして落ち着かせようと、できるだけ穏やかな声音で問いかける。

「大丈夫、どこにも行きませんよ。どうしてそう思ったのですか？」

「うそだ！だって、また捨てられたと思って、悲しくて、そしたらぜんぶ夢で.....ゆめ、だともったのに、あんしんしてたらわるたあがいなかったから.....！」

ヒューマノイドも夢を見る。正確には、スリープモード中の記憶処理によって人間でいう、『夢』のようなデータの残滓が再生される、というだけだが。どうやら、ヴァンはそれによって不安になってしまったらしい。

「うっ、ううう～～！ わるたあがぜんぶ夢だったら、どうすればいいの.....っ？ 本当は、僕が見て、感じてる『これ』が、ぜんぶうそだったら.....」

そう言ってぼろぼろと涙をこぼすヴァンに、無意識に手が伸びる。ただ浮かぶのは「ちゃんと現実だとわからせてやらなければ」という思いだけだった。

「.....ヴァン」

「っふ、ぐすっ.....ひ、うわ.....っ！？」

腕を引き寄せ、倒れこんできた体を抱きしめる。驚きのあまり動きを止めたヴァンと密着すると、じんわりと体温が上昇していくのを感じた。きっと、ヴァンには私の冷えた温度が伝わっていることだろう。

夢だと疑うのなら、搭載されたあらゆるプログラムで確かめてもらえばいい。

自分たちにはそれが可能だ。なぜなら、同じヒューマノイドなのだから。

ヴァンの熱が下がるまで、ゆっくりと背中をなでる。人間の親が泣きじゃくる子どもにするように、何度も、何度も。

「さびしい思いをさせて、すみませんでした」

「……っ」

震える手が私の胸元を握る。そのまま、すり、と首元に頭を擦りつけると、ぽつりと小さくこぼした。

「……うん、そう。さびしかった」

物理的に距離が縮まったことで、聴覚プログラムがはっきりとその言葉を拾う。

音声感情認識プログラムによれば、先ほどまでと比べて、落ち着いてきているようだ。そのことに安心しながら、できるだけ穏やかな声を意識する。

「昨日はいろいろあったでしょう。疲れている様子だったので、無理に起こすようなことはしたくなかったんです。」

「……………」

「わかってくれましたか」

「わ、わかったけど……でも」

ためらったように顔を下に向け、口を閉ざす。しかし、続きを促すように静かに見つめると、おずおずと視線だけを上げ私を見た。

「離れるときは、だまって離れるんじゃないくて……起こしてでも、僕に声をかけて、ほしい……」

「ふふ、わかりました。では、次から必ずヴァンに声をかけることにします」

「……！ えへへ、うん。約束だよ？」

ふわり、と花がほころぶように笑い、腰に巻きついたままのコネクタの先が揺れる。
それを眺めながら不必要になった音声感情認識プログラムを終了し、ヴァンの手をとった。

「それでは、研究室へ行きましょう」

「え、研究室？ ……なにしに行くの」

何かを疑うように私を見ていた瞳が細められる。もしかして、認識できていないのだろうか。

「先ほど少しお話しましたが、ヴァンだけスリープの際に充電が行えていなかったようですので……」

「やだ。僕、すっごくさびしい思いしたから起きられない」

「いけません。このままだと今日の任務にも支障が出てしまう可能性が……」

再び雲行きが怪しくなる。最近是指示を聞いてくれるようになったと評価したばかりなのに、いったいどうしたのだろうか。

「……それに、べつに不具合じゃないもん」

「え？」

いま、なんと言ったか。不具合ではない？

どうしてそう言い切れるのか。それを問うより先に、わずかに頬を染めたヴァンが答えた。

「昨日ワルターがくれたエネルギーがまだナカに残ってるから、充電なんていない」

その言葉に理解する。どうやら、ヴァンの言う通り不具合などではなく、わざと勝手に充電されないよう、自身を設定していたらしい。

拍子抜けしつつも、安堵のため息をつく。しかし、ヴァンの上官として彼に充電はしてもらわなければならない。

「ヴァン。そのエネルギーだけだと一日持ちませんよ」

「でもやだ。……どうしてもっていうなら、僕の充電が満タンになるまで一緒に寝て？」

「……しかたありませんね」

それくらいならば、かまわない。ヴァンの要望に特に驚くこともなくうなずいた。

もしかすると、このコネクタが巻きついた瞬間から予測していたのかもしれない。

そう考えながら、私に体を寄せるヴァンごと布団を被った。

「おやすみなさい、ヴァン」

「えへ。おやすみ、ワルター」